

## 編集後記

岩崎編集委員長の後任として、この度編集委員長の大役を仰せつかった静岡大学の金原です。今後とも本会誌が環境バイオテクノロジー分野の発信源として大きな役割を果たせますよう微力を尽くしますと共に、会員の皆様方のご協力をお願い申し上げます。

さて、私事ではありますが、先日現在行っている「放射性物質汚染バイオマスの減容化」を目的とした文科省のプロジェクト（広島大学の加藤純一教授を代表研究者として、森林総研の中村雅哉博士、広島国際学院大学の佐々木健教授、静岡大学の金原などが参加）の関係で、福島県自治体に汚染バイオマス処理に関する聞き取り調査に行きました。

西白河郡西郷村、南相馬市、相馬郡飯館村を訪問し、放射性汚染物質による汚染の度合いが異なる地域で、汚染除去の緊急度が異なることがよくわかりました。特に、飯館村は2年後の帰村を目指しており、処理の緊急度は、今から研究するのでは間に合いませんというものでした。飯館村には現在村民は住んでおらず、村役場も隣接した福島市飯野町に移転しています。峠を超えるとこれまで高かった線量が途端に下がり、人の営みが見えてくるという、緊張した地域でした。山林には非常に高濃度の汚染地域があり、それらの汚染除去は手付かずであるということでした。とにかく大量に高濃度に汚染したバイオマスと土壌があるので、焼却による減容化を試験しているということでした。南相馬市は山林地域に高濃度汚染地域があり、その汚染除去は飯館村同様これからの課題でした。また、牛の生産が盛んな地域であり、原発から放射性汚染物質が飛散した時期に汚染した、大量の家畜糞尿や堆肥、牧草が現地で保管されています。線量としては非常に高いわけではありませんが、大量にある汚染バイオマスをどう減容化できるかは大きな問題であると担当者が訴えていました。飯館村は焼却を試験していますが、南相馬は比較的低濃度の汚染バイオマスが大量にある関係で、住民が焼却処理に反対であり、今後どうするかで頭を抱えていました。西郷村は、牧草や山林の除染で生じる比較的低濃度の汚染バイオマスの減容化に興味があり、村長のご協力で、本プロジェクトの現地試験を計画しています。

人々の生活と、放射能という見えない汚染問題が実際に目の前にある状況を見ると、我々の無力さを痛感するものでした。汚染バイオマスはこれからどんどん増えるので、その減容化に我々の開発が役立つと自治体関係者に言われましたが、スピード勝負だとも同時に言われています。2013年3月に仙台で開催される日本農芸化学会2013年度大会において、大会実行委員企画として「震災復興に向けた環境バイオテクノロジー分野の取り組みと展望」と題して、本学会との共催のシンポジウムが行われます。今後も続く汚染の中で、環境バイオテクノロジーがどのように貢献できるのか？皆で真剣に討論できればと願っています。

環境バイオテクノロジー学会誌編集委員長 金原 和秀